





第2章

元気を発信する

三島村

新田 栄治

(鹿児島大学法文学部)

人口 446 人の村が今、世界に向けて『元氣』を発信している。その名は「三島村」。

三島村は硫黄島、竹島、黒島およびその近辺の新硫黄島などの無人島や岩礁からなる村である。長崎鼻から南南西へ 40km の硫黄島と竹島、枕崎から 50km の黒島があり、東シナ海上に点在している。南西諸島の最北端にある。年平均気温は 19.4 度と温暖で、降雨量はもっとも多い黒島で 3,100mm と、かなりの雨が降る。

竹島は周囲 9.7km、面積 4.18km²、人口 94 人(1999 年 3 月 31 日現在。以下同じ)、硫黄島は周囲 14.5km、面積 11.79km²、人口 140 人、一番大きな黒島は周囲 15.2km、面積 15.65km²、人口 212 人である。総人口 446 人という有数の過疎の村である。海と山の豊かな自然に恵まれた島であるが、毎年台風に襲われる過酷な自然とも向き合っている。硫黄島は活発な活火山の島でもある。

三島村へのほとんど唯一の交通手段は毎月 11 往復を運行している村営の 800t の船「みしま」である。他には不定期の小形飛行機便があるのみである。

三島村が直面しているのは過

疎と高齢化という、全国共通の難題である。60～70 歳代人口が最大であり、逆に 15～25 歳代人口は極めて少ない。村に高校がなく、中学校を卒業すると進学のために本土に移住せざるをえないこと、若年世代にとり村内での職が乏しいことなどが原因である。そのため若者は島を出ると帰ってこない。就業人口で最大なものは建設業であり、過疎地の通例の公共事業が社会的に大きな意味を持つ。

だが、交通の不便さ、過疎と高齢化というハンデを乗り越えて、「GENKI UP MISHIMA」というスローガンを掲げて、三島村は 21 世紀に向けて大きく飛躍しようとしている。それは畜産、観光、教育、それに村から国際社会への『三島村の元氣さ』の発信によってである。

産業

三島村の産業には畜産業、農林業、水産業、鉱業がある。タケノコや椿の実を産する農林業、イセエビ漁の水産業、珪石採取の鉱業があるが、農林業 800 万円、水産業 1,500 万円といずれもたいした金額をあげてはいない(1999 年度)。

今最も期待が高いのは「三島牛」の畜産業である。「三島牛」は鹿児島県のブランド肉用牛である薩摩黒毛和牛のひとつで、近年味の良さから高く評価されているものである。どの島も草地在る三島村では、この黒毛和牛の種付けから子牛に育てるまでを行い、子牛を村外の市場へ出荷する。村内では 550 頭ほどの牛が飼われている。三島すべてに牧場があるが、特に黒島では全戸数 112 戸のうち 32 戸が三島牛の飼養農家であり、約 320 頭の牛がいる。2000 年には 287 頭が出荷され、8,073 万円の売上高であった。近年では 1 億円を超える年間売上高を記録するまでになっている。三島牛の基幹産業化は三島村が重点的に行っており、草地の改良、環境整備、飼養

農家への補助金などの支援策が功を奏して、今では「三島牛」として市場でもブランドが確立してきた。村の過疎対策として行われている村外からの定住促進助成制度においても、畜産への就業が重点的に行われ、定住者には子牛 1 頭を贈り、県有牛や村有牛の貸付、牧場・草地・畜舎等への貸付が行われている。この制度により、岡山県から移住してきた一家もあり、三島村の自然の中で牛とともにおおらかな生活を楽しんでいる。

鹿児島県が薩摩黒毛和牛と薩摩黒豚を県の特産品として全国に宣伝し、消費者の評判も高くなってきた。薩摩黒毛和牛が市場に出回るには、良質の子牛の育成が基盤になければならない。三島村の「三島牛」は三島村だけでなく、鹿児島県全体の畜産業にとってもこれからずっと重要になってくるだろう。2001 年秋には新型フェリーが就航する予定であり、牛の出荷にも大きな利便となることだろう。過密状態の畜舎のなかで薬漬けで育てられたのではなく、豊かな自然のなかで放牧されて育った健康で優秀な子牛の生産が、三島村の特徴として、今後もさらに評価されることが期待できる。

三島カップ・ヨットレース

三島村は言うまでもなく、海に囲まれている。四方を囲む海は三島村と外の世界を隔てるものではなく、外の世界と360度の全方位に開けた道である。この海道をヨットが走る。1990年8月に始まったヨットレース、「三島カップ・ヨットレース」は以後毎年8月第一土曜日に、

薩摩半島南端の山川港を出発し、600マイル南の竹島港をゴールとして行われてきた。このレースには県外からの参加者も多数あり、毎年40艇以上のヨットが参加している。このレースは当初村おこしイベントとして始まったが、単発的なイベントで終わらせず、海や島を愛する人々のために、故郷を愛する人々のために継続しようという思いが集まった人々の間に浸透し、今年までに連続11回という定着した催しとなり、単なる村おこしイベント



三島カップ・ヨットレース ©三島村役場

のレベルを超えた、国際的ヨットレースとして成長している。三島カップ・ヨットレースを始めたきっかけは、三島村に外の世界から多くの人々に来てほしいという気持ちが始まりだが、500人を越える参加者の宿泊や食事の手配など、小さな島が主催するにはたくさんの問題が発生した。これらの難問を解決するために、トップダウンではなく、村役場の行政と三つの島の島民とが話し合いを重ねることによってひとつひとつ解決してきた。村の人々の結びつきがさらによくなっていくという効果も生まれた。

三島カップは勝負を競うレースだけでなく、その後の懇親パーティーが参加者の大きな楽しみになっており、レースもだがパーティーも、という人が増えている。村

世界につながる 三島村

ヨットレースに加えて、アフリカのギニアからジャンベがやって来た。ギニアの伝統楽器である太鼓、ジャンベの演奏者ママディ・ケイ

民総参加の手作りの歓迎が参加者の気持ちをなごませる。抽選会では三島牛の子牛1頭が賞品で、これも三島牛の大きな宣伝になっている。ヨットレース参加者は世界中の海を駆け巡る人々であり、三島村の名前はヨットにのって世界中に広がっていく。

離島の小さな村が始めた三島カップは全国的な評価を受け、1994年に「潤いと活力あるまちづくり優良地方公共団体部門」で自治大臣賞を、「地域づくり全国交流会議」で国土庁長官賞を受賞した。

三島カップレースに思いを寄せる人々は、「アメリカズ・カップ」に対抗する「三島カップ」というのが目標だ。

タとそのグループが1994年8月に硫黄島にやってきた。以来、三島村の子供たちとママディさんとのジャンベを通じた交流が始まった。ママディさんにジャンベを習った子供たちはそのリズムのとりこになり、三島村がジャンベで盛り上がった。子供たちはママディさんといっしょに2週間の演奏旅行に出

かけ、名瀬市、岡山県大佐町、美星町、広島市とステージに立ち、三島村の子供たちは大きな自信をつけた。もちろん三島村にも古くからの伝統芸能がある。それらに加えて、西アフリカのジャンベが新たな伝統芸能になりつつある。1998年には4人の中学生がギニアに派遣され、交流したのもジャンベの縁である。ママディさんはずっと三島村にやってくる。交流会「三島村ジャンベ・アンサンブル」ではママディさんと子供たちがジャンベ演奏とアフリカン・ダンスの輪を繰り広げる。離島の子供た

ちがまったく異文化のアフリカの心と交わるという、日本でもめずらしい体験だ。

2000年10月に硫黄島で開催された「国際火山ガス野外研究会」でも、硫黄島のジャンベ楽団「WASSADA」がジャンベ演奏で世界からの参加者と島民との交流を盛り上げた。

ジャンベが広げた子供たちの広い視野は、宇宙へも広がる。インターネットによる世界中との通信が可能となった現在、離島であることは情報発信・受信に以前ほどには不利ではない。硫黄島の三島小中学校と黒島の片泊小中学校は文部科学省の「へき地学校マルチメディア活用研究事業」の指定校となり、インターネットを使って遠くの学校との共同授業などの実験を行っている。三島小中学校と鹿児島市とをテレビ会議システムでつないで、鹿児島市の会場へジャンベ演奏を披露したり、あるいは黒島の太里小中学校ではスペースシャトルの宇宙飛行士・毛利衛さんと交信したりもしている。

通信システムの急速な進歩は、三島村にも大きな影響を及ぼそうだ。狭い離島が世界とつながることが容易になった。



ジャンベの演奏 ©三島村役場

観光立村

外の世界とのつながりのひろがり、三島村の観光立村への希望につながる。かつて、三島村は大手観光開発企業を誘致し、リゾート開発を行ったあげく、失敗した苦い体験がある。これからの社会は大規模リゾートの時代ではなく、多くの人々が求めているのは、心が癒される場である。三島村は荒されていない自然と多くの伝統芸能、歴史的文化遺産を持っている。これらは、かけがえのない財産であり、観光資源となる。開発行為はこれらの財産を消滅させてしまう。硫黄島の海岸の露天温泉は大変な魅力であり、何も無い島の草原や山肌、360度眼下に見渡せる海は疲れた人々の心を癒す。硫黄島の活火山は単調な島の自然に強烈なインパクトを与える。このようなところはめったにない。

自然が好きな人には、三島村すべてが魅力的だろう。釣りが好きな人には、全島まさに天国だ。歴史が好きな人には、硫黄島の俊寛や平家の落人に関係する遺跡や伝説に引き込まれる。グルメが好

きな人には、新鮮な魚、タケノコ料理、それに焼酎と、舌と喉にこたえられない楽しみがある。伝統芸能が好きな人には、硫黄島の八朔踊り、竹島の馬方踊り、黒島の面踊りと、踊りに歌に限りがない。バードウォッチングが好きな人には、島内の森に住むさまざまな野鳥、それに硫黄島の空飛ぶクジャクが迎えてくれる。

現在の宿泊施設は少数の民宿が主である。大型宿泊施設は必要ないし、過去の例から見て、逆効果だろう。観光客は例年 2,500 ～ 3,000 人程度であるが、現在の交通手段である限り、大幅な増加は見込めない。1日当り 10 人弱という観光客を 20 人程度にまで引き上げることができれば、観光も村の経済に一定の役割が出てくる。現在の宿泊施設の収容人数の範囲内で、どこまで観光客の増加を計るかが課題となってくる。2001 年秋には新型フェリーが就航の予定であり、現在 11 往復が 19 往復に増える。新造船就航は観光客の増加につながる可能性がある。外から車が島に持ち込まれ、騒音と事故、環境破壊が生じることを予防する対策も考えねばならない。現在の三島村の生き方を見ていると、現在

の環境を守りながら、観光を目指すことが可能になると思う。

三島村には大型観光は似合わない。団体ツアーも似合わない。今のような素朴な民宿があり、やさしい宿のおばさんがいればよい。人々はそれを求めてやってくるのだから。三島村の価値を認めて、

三島村の課題

外の世界とのつながりだけではためである。国際交流と観光だけでは人々は生きていけない。三島村に住む人々が安心して、豊かに、楽しく暮らせることが根底になればならない。高齢者の多い島の村として、三島村はさまざまな施策を行っている。独居老人が緊急時にブザーを押せば、役場や看護婦につながる緊急通報装置は全老人家庭に設置されている。各地区に老人福祉センター、生活センター、福祉農園が設けられた。これらは三島村だけではないかもしれないが、高齢者が非常に多い三島村では必須の施設であり、その整備が計られてきた。2000年4

三島村が好きになった人々が繰り返し訪れるようなリピーター型のエコ・ツーリズムがこれからの三島村観光のあるべき姿だと考える。硫黄島の飛行場を使った航空機と新造フェリーとを併用した三島村へのツアーができれば、非常に魅力的な場所となるだろう。

月に始まった介護保険を補完する施設として、これらの福祉センターや生活センターはミニ介護施設へ改修され、バリアフリー化があわせて進められている。島で生まれ、島で晩年を過ごす高齢者たちが安心して暮らせるように、三島村ではがんばっている。

三島村の子供たちが、こうあってほしい村の姿を書いている。それらは、自然に恵まれた美しい島であり、病気になっても安心して暮らせる島であり、交通の便利な島であり、交流の島である。

21世紀に向けた三島村は、これらの夢がかなえられる島になるために「GENKI UP」し続けている。